

「社会福祉援助技術現場実習」並びに「精神保健福祉援助実習」 の実習課題の自己評価に関する比較研究 ——実習学生の自己点検確認調査から——

梅 澤 嘉一郎*

A Comparative Study of Self-Assessment toward Field Work Subject both Social Work Practice and Psychiatric Social Work Practice From Self-Checking Confirmation Sheets

Kaichiro UMEZAWA

要 旨

本研究は、平成17年度の「社会福祉援助技術現場実習」（以下、「SW実習」と略す）又は「精神保健福祉援助実習」（以下、「PSW実習」と略す）を終了した段階でのアンケート方式による実習学生の自己点検確認結果から、問題点と課題を明らかにすることにより両実習の事前指導課題を明確にし、今後の事前学習並びに事後学習の指導に活かすことを目的とするものである。

自己点検確認結果と実習先評価との関係は、SW実習とPSW実習の3つの評価項目である「利用者理解」、「専門機能の理解」及び「実習基本姿勢」の総計では、SW実習の方が、PSW実習よりも施設評価が高い状況が明らかにされた。

施設評価の方が自己評価より高い順に、SW実習では、「実習基本姿勢」、「利用者理解」、「専門機能の理解」の順であるが、PSW実習では逆転していることも明らかにされた。

自己評価項目全体では、SW実習全体とPSW実習全体では殆ど差がないことが明らかにされた。

SW実習とPSW実習との大区分評価項目の特徴として、「コミュニケーションの理解と実践」や「専門機能の理解」では、SW実習が上回り、「実習に取り組む姿勢」はSW実習が若干上回るものの「利用者のニーズの理解」、「利用者のニーズの自立支援」、「自己覚知」、「エンパワメント」及び「ソーシャルワーカーとしての専門職の取り組み」はPSW実習がSW実習を上回っていることが明らかにされた。

以上から、PSW実習はSW実習と比べて「コミュニケーションの理解」が難しく、「自己覚知とエンパワメント」の自己評価が高くなる傾向が明らかにされた。注1)

従って、今後の両実習の事前・事後指導では、上記結果を踏まえて対応していく必要がある

*教授 社会福祉学、精神保健福祉援助技術論

こと。

併せて、実習受け入れ先の実習環境並びに実習指導環境に応じ、養成大学と実習受け入れ先との連携により、学生の希望を踏まえた実習施設選択ができるようマッチングの大切さも課題であることが、明らかにされた。

キーワード：社会福祉援助技術現場実習、精神保健福祉援助実習、実習課題、実習自己点検確認

1. はじめに

本学社会教育学科は、私立大学では教育学部は数少ないというメリットを生かし、21世紀の超高齢化社会、メンタルヘルスの時代をも踏まえ、平成14年度よりカリキュラムを改訂し、社会教育主事、社会福祉主事、学芸員、図書館司書等の資格のほか、社会福祉士、精神保健福祉士の国家試験受験資格取得のため、平成15年度から本大学においてもSW実習並びにPSW実習が開始され、4年目に入り、平成17年度までに、社会福祉援助技術現場実習が115名、精神保健福祉援助実習が58名、併せて173名の学生が実習を終えた。

この現場実習は約1ヶ月の長期にわたり、利用者の人命はもとより権利擁護や人権への配慮も必要なだけに実習指導の徹底が強く求められている。

今回は、社会福祉援助技術現場実習ならびに精神保健福祉援助実習終了学生の実習自己点検確認調査結果から、実習課題の到達点と課題を比較検討し、今後の問題点と課題を明らかにすることにより、両実習の今後の課題を明らかにし、今後の事前学習並びに事後学習の指導に活かすことを目的とするものである。

2. 研究目的

実習4年目を迎え、平成17年度からは、SW及びPSW双方の養成校協会にも加入し、対外的にも本大学が養成校としても認知され2年目に入り実習教育にも弾みがつきつつあるといえる。

かかる状況から、平成17年度においては、事前指導での部外講師により、SW実習では、介護技術の実践時間を前年度より多くしたり、PSW実習では、精神障害者の理解を深めるために2回にわたり厚みを持たせたりへの対応もおこなっているものの、まだまだその対応は、実習体制も含め不十分であることは否めない。

「社会福祉援助技術現場実習」並びに「精神保健福祉援助実習」の実習課題の自己評価に関する比較研究

実習教育の成果につき、まだ養成校が両実習で二つに分かれていることもあり、両実習の比較検討の文献はまだ殆ど見当たらない状況である。

そこで、本研究では、両実習について、実習先での実習課題の到達状況について、実習学生の自己点検確認調査結果から比較検討することにより、実習教育の課題を明確にし、今後の事前学習並びに事後学習の指導に活かすことを目的とするものである。

3. 研究対象と方法

「実習基本姿勢」SW 及び PSW 両実習を終了した学生に授業の際に配布し、後日、提出ということで下記のとおりアンケートを実施し、その結果を検討し分析する方式をとった。

(1) アンケート実施日及び実施対象

ア、SW 実習

平成 17 年 11 月 9 日 SW 実習の時間に配布し、1 月 11 日までに、提出する方式をとった。20 名（提出時点、社会教育学科 3 年生）回答／36 名（提出時点、社会教育学科 3 年生 35 名、生活文化学科 1 名）配布し、アンケート回収率は、55.6%であった。

アンケート協力者の実習先種別は、特別養護老人ホームが 6 名（30%）、老人デイサービス施設が 2 名（10%）、知的障害者更生施設が 4 名（20%）、知的障害者授産施設が 4 名（20%）、社会福祉協議会が 4 名（20%）となっている。（表 1 及び図 1 参照）

イ、PSW 実習

平成 17 年 12 月 20 日、PSW 実習の補講時間に配布し、18 年 1 月 13 日までに、提出する方式をとった。

10 名（提出時点、社会教育学科 4 年生 4 人、心理学科 4 年生 6 名）回答／29 名配布（提出時点、社会教育学科 4 年生 15 人、心理学科 4 年生 14 名）で、アンケート回収率は、39.1%であった。

アンケート協力者の実習先種別は、精神科病院が 4 名（40%）、精神科クリニックが 3 名（30%）、精神障害者生活訓練施設が 2 名（20%）、精神障害者地域生活支援センターが 1 名（10%）となっている。

一方、施設種別別アンケート回収率では、最も回収率の高いのは、高齢者施設で、施設数回収比及び学生数比ともに 100%である。次いで、学生数比では、SW 実習では社会福祉協議会が 67%、障害者施設が 57%と続いている。PSW 実習では、施設数比では、神経科クリニックが 100%となっており、次いで神経科クリニックが 67%、社会復帰施設が 50%と続いている。

表1 実習施設数・実習学生数の推移並びに今回アンケート回収の状況

区分	施設種別	平成 15 年度		平成 16 年度		平成 17 年度		アンケート回収数		アンケート回収率(%)	
		施設数	学生数	施設数	学生数	施設数	学生数	施設数	学生数	施設数比	学生数比
SW	高齢者	14	14	10	15	8	8	8	8	100	100
	障害児・者	14	16	13	18	9	14	8	8	89	57
	児童養護	2	4	5	5	7	8	0	0	0	0
	社会福祉協議会	0	0	2	2	6	6	4	4	67	67
	女性相談所	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	児童相談所	3	3	1	1	0	0	0	0	0	0
	計	32	37	32	42	30	36	20	20	67	56
PSW	精神科病院	4	4	4	10	6	12	4	4	67	33
	神経科クリニック	1	1	3	9	3	6	3	3	100	50
	社会復帰施設	1	1	3	4	6	9	3	3	50	33
	保健所	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
	精神保健福祉センター	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
	計	6	6	10	23	17	29	10	10	59	34
合計		38	43	42	65	47	65	30	30	64	46

【備考】 1. アンケートの回収は、平成 18 年 1 月に回収。PSW は実習が 4 年生のため、授業がないため、回収率が低くなっている。

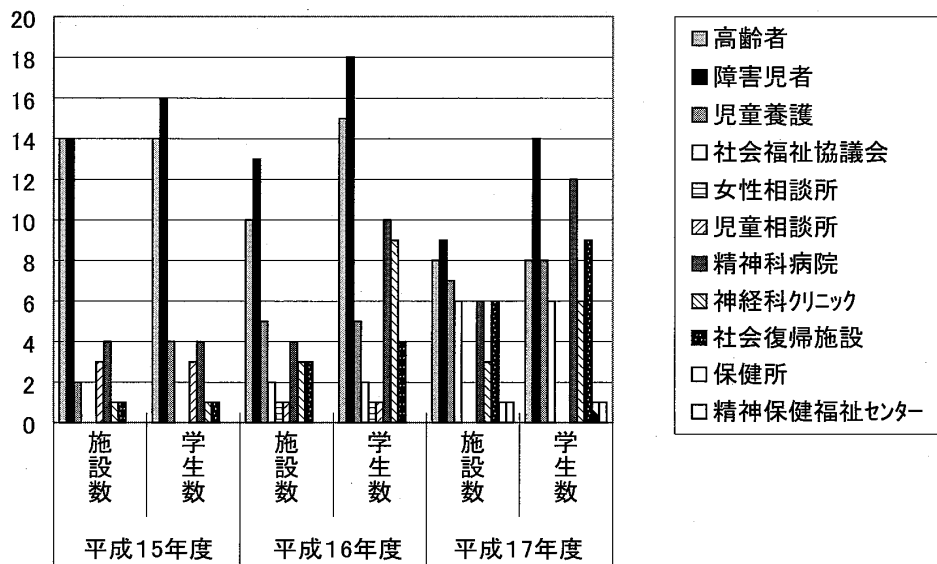


図1 実習施設数・実習学生数の推移

「社会福祉援助技術現場実習」並びに「精神保健福祉援助実習」の実習課題の自己評価に関する比較研究

学生数比では、神経科クリニックが50%、精神科病院及び社会復帰施設が33%となっている。

PSW 実習の回収率が SW、実習よりも低調な理由として、実施日が、実習振り返りで、部外講師の講義があり、そのためその日の提出が困難で後日回収となり、4年生のため、1月の国家試験や卒業試験なども控え、アンケート記載の時間確保が3年生の SW 実習より難しかったものと思われる。

(2) アンケート項目等

両実習では、ソーシャルワーカーとしての専門職としての「価値・倫理・原則」を前提に、「利用者の理解と関係形成」、「実習施設（機関）の役割と専門機能の理解」及び専門職に欠かさない自己覚知（自己理解）並びに援助技術等がエンパワーされたかというエンパワーメントということから、「自己覚知とエンパワーメント」を3領域とし、各領域毎に、さらに大区分を3～4項目を設定、さらに大区分を5つの中区分に設定し、アンケート項目とした。なお、両資格の実習の比較研究を可能にするため、ほぼ同じ質問項目で実施した。

その内容については、別紙、「実習状況自己点検確認調査表」のとおりである。

4. 結果

(1) 集計方法

集計結果は、まず、SW 実習及び PSW 実習毎にそれぞれ集計を試みた。

その状況は、別紙、「実習状況自己確認点検確認調査結果表（SW 総計）」及び「実習状況自己確認点検確認調査結果表（PSW 総計）」である。（図 11 及び図 12 参照）

次に、SW 実習及び PSW 実習につき比較するためにアンケート結果を一体化させたものが、「SW・PSW 実習の自己点検確認調査結果比較表」である。（図 10 参照）

さらに、上記の比較表から、大区分までを集約し、「SW・PSW 実習の自己点検確認調査結果概況表」とした。（図 5 参照）

(2) 自己評価と施設評価との関係

自己評価の結果を分析する前に、自己評価と施設評価との関係を明らかにしておきたい。

実習自己評価と実習施設評価との関係をまず確認後、以下、実習環境及び実習指導環境に関連するアンケート、項目を中心に、その結果について述べたい。（表 2、図 3、図 4 参照）

施設評価については、今回は調査できなかったため、過去の調査結果から、SW 実習は、平

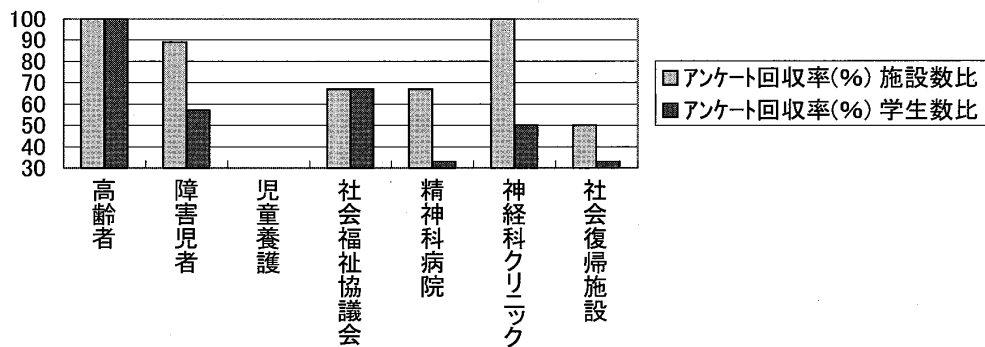


図2 アンケート回収率

表2 アンケートにおける自己点検確認結果と実習先評価との関係

評価項目	SW 実習施設評価			SW 実習自己点検評価			PSW 施設評価				PSW 実習自己点検評価			
	高齢者	障害者	SW 施設全体	高齢者	障害者	SW 自己計	病院	クリニック	社会復帰	PSW 施設	病院	クリニック	社会復帰	PSW 自己計
利用者理解	79	83	81	69	65	70	77	73	56	72	68	72	75	71
専門機能の理解	79	69	74	67	60	69	57	80	67	68	62	49	53	59
実習基本姿勢	83	90	89	71	66	73	77	77	78	75	77	66	76	77

【備考】 1, 実習自己点検評価は、今回のアンケート結果。

2, 施設評価は、SW が平成 15 年度の実習先の評価を示す。PSW は、平成 16 年度の施設評価を示す。

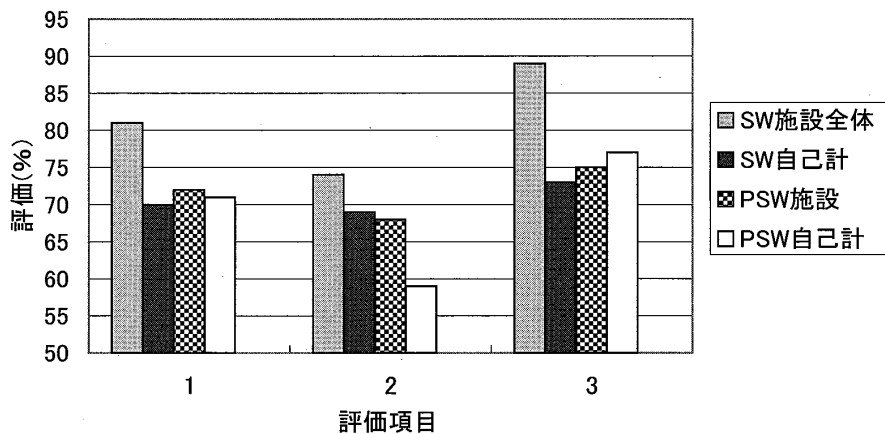


図3 実習先評価と自己評価との関係

【備考】 1, 評価項目は、「1」=利用者理解 「2」=専門機能の理解 「3」=実習基本姿勢

成 15 年度, PSW 実習は平成 16 年度の調査結果から実習種別別に, SW 実習並びに PSW 実習の実習種別毎に自己評価毎に自己評価と施設評価との関係を検証したい。

アンケートにおける自己点検確認結果と実習先評価との関係は, SW 実習と PSW 実習の 3 つの評価項目である「利用者理解」,「専門機能の理解」及び「実習基本姿勢」の総計では,

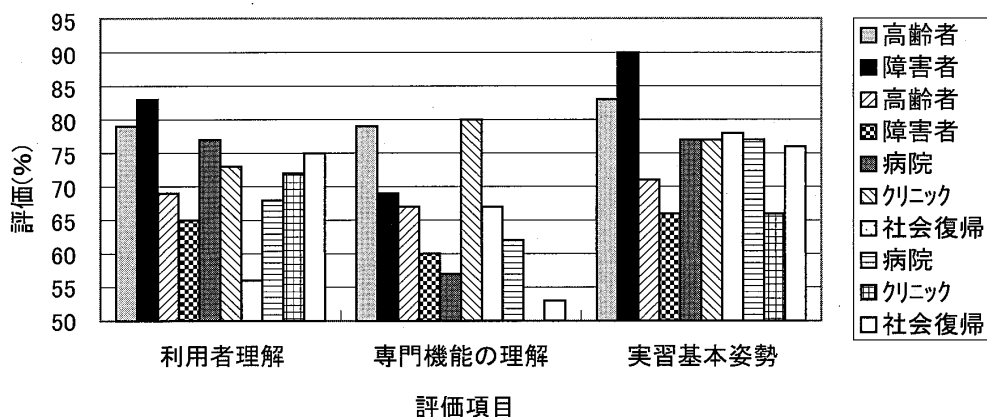


図4 実習先別の実習先評価と自己評価との比較

SW 実習の方が、PSW 実習よりも施設評価と自己評価で 14 点の差で、SW 実習の方が施設評価は高い。

評価項目の内訳別に施設評価の方が自己評価より高い順に、SW 実習では、「実習基本姿勢」、「利用者理解」、「専門機能の理解」の順となっており、PSW 実習では、「専門機能の理解」、「利用者理解」の順であり、「実習基本姿勢」は、自己評価の方が施設評価より高い。

「実習基本姿勢」面で、SW 実習での施設評価は、PSW 実習より、14 点の差が見られ、PSW 実習については、学生の評価より、施設評価の方が厳しい状況が確認できた。

(3) 自己点検評価項目全体結果と SW 実習並びに PSW 実習との関係

「利用者の理解と関係形成」、「実習施設（機関）の役割と専門機能の理解」及び実習基本姿勢に伴う「自己覚知とエンパワーメント」を 3 領域とし、さらに各領域毎に大区分を 3～4 項目を設定後、大区分を 5 つの中区分に設定した実習学生の自己点検確認結果は、SW 実習全体と PSW 実習全体の平均点は、SW 実習が 71 点。PSW 実習は 69 点で、PSW 実習が 2 点下回っている程度で、殆ど差がないことが明らかにされた。（表 3、表 4、図 5、図 6 参照）

(4) 自己点検評価項目 3 領域と SW 実習並びに PSW 実習との関係

以下、3 領域別に自己評価結果を述べたい。

3 領域別では、「利用者の理解と関係形成」が PSW 実習が 1 点上回り、「実習施設（機関）の役割と専門機能の理解」で、SW 実習が大区分平均で 10 点上回っている。

「自己覚知とエンパワーメント」では、PSW 実習が大区分平均で 4 点上回る結果であった。

平成 17 年度 SW・PSW 実習の自己点検確認調査結果総括表

計 1＝病院＋診療所

SW 平均と PSW 平均の差＝SW 計－PSW 計

計 2＝地域生活支援センター＋生活訓練施設 高齢＝特別養護老人ホーム＋老人デイサービス

障害＝障害者入所更生施設＋障害者通所授産施設 社教＝社会福祉協議会

表 3 SW 及び PSWj 実習生の自己点検確認結果総括表

評価項目	病院	診療所	計 1	地域セ	生訓	計 2	psw 計	高齢	障害	社協	SW 計	差
I 利用者の理解・関係形成	68	72	70	77	74	75	71	69	65	78	70	-1
1. コミュニケーションの理解と実践	63	71	69	87	73	78	63	70	70	80	74	11
2. 利用者との関係形成とその活用	82	71	77	60	87	78	78	78	80	83	78	0
3. ニーズの理解	75	76	75	100	67	78	76	64	58	82	66	-10
4. 利用者の自立支援	52	71	58	60	70	65	67	63	53	67	60	-7
II 実習先の役割と専門機能の理解	62	49	63	57	52	53	59	67	60	77	69	10
1. 業務の専門性の理解	61	56	60	60	60	60	58	69	55	75	66	8
2. 組織の専門的機能の理解	68	61	69	50	50	47	63	67	53	81	69	6
3. 利用者サービスの意義・特性	58	31	59	60	47	51	57	66	73	75	73	16
III 自己覚知とエンパワメント	77	66	77	80	74	76	77	71	66	76	73	-4
1. 実習に取り組む基本姿勢	77	80	78	87	77	80	79	85	82	79	83	4
2. 自己覚知	84	69	80	93	77	82	80	62	67	80	71	-9
3. エンパワメント	71	76	81	87	80	82	77	68	65	70	69	-8
4. SW への専門職への取り組み	74	40	69	53	63	60	71	67	51	73	68	-3
評価の総合計	69	62	70	71	67	68	69	69	64	77	71	2
	207	189	211	214	200	204	207	207	191	231	212	5

表 4 SW 及び PSW 実習の自己点検確認項目の比較

点検項目	SW 全体	PSW	病院	診療所	地域生活	生訓	高齢	障害	社協
利用者理解	70	71	68	72	77	74	69	65	78
コミュニケーション理解	74	63	63	71	87	73	70	70	80
利用者との関係形成	78	78	82	71	60	87	78	80	83
ニーズの理解	66	76	75	76	100	67	64	58	82
利用者の自立支援	60	67	52	71	60	70	63	53	67
実習先の役割と専門機能	69	59	62	49	57	52	67	60	77
業務の専門性	66	58	61	56	60	60	69	55	75
組織の専門的機能	69	63	68	61	50	50	67	53	81
利用者サービスの意義	73	57	58	31	60	47	66	73	75
自己覚知とエンパワメント	73	77	77	66	80	74	71	66	76
実習への基本姿勢	83	79	77	80	87	77	85	82	79
自己覚知	71	80	84	69	93	77	62	67	80
エンパワメント	69	77	71	76	87	80	68	65	70
専門職への取り組み	68	71	74	40	53	63	67	51	73

(5) 自己点検評価項目中の大区分全体と SW 実習並びに PSW 実習との関係

SW 実習が PSW 実習を上回っている大区分項目として、「コミュニケーションの理解と実践」や「専門機能の理解」では、SW 実習が 10 点程度上回っているが、「実習に取り組む姿勢」は

「社会福祉援助技術現場実習」並びに「精神保健福祉援助実習」の実習課題の自己評価に関する比較研究

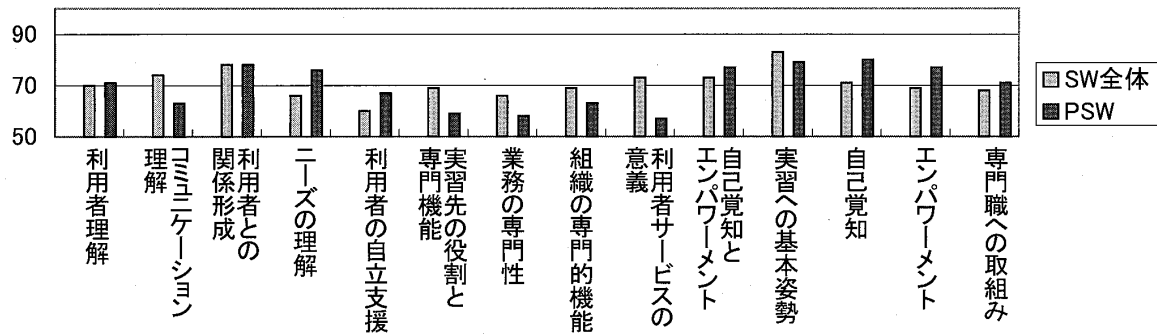


図5 自己点検項目別 SW 及び PSW の比較

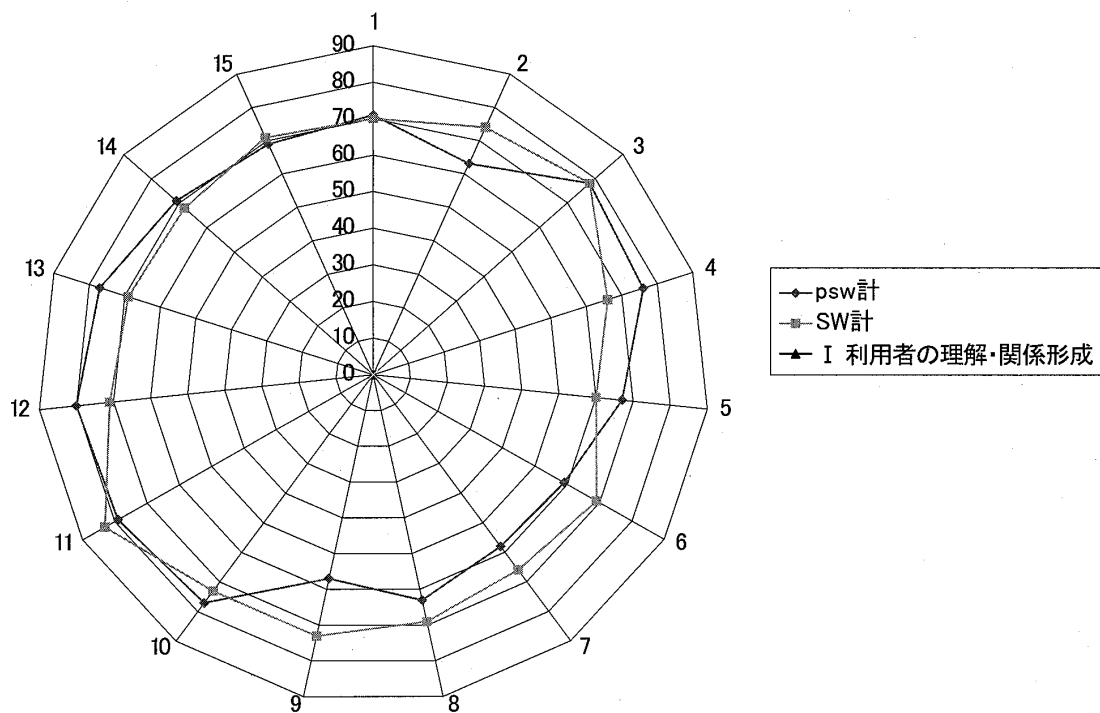


図6 SW・PSW 実習自己点検確認項目の比較

SW 実習が4点上回っているものの大区分の「利用者のニーズの理解」,「利用者のニーズの自立支援」,「自己覚知」,「エンパワメント」及び「ソーシャルワーカーとしての専門職の取り組み」は区分平均で約7点 PSW 実習が SW 実習を上回っており, 3領域の評価項目の SW 実習と PSW 実習との関係は, 危険率10%では差が認められた。

(6) 自己点検評価項目中大区分項目と SW 実習並びに PSW 実習の実習種別との関係

以下, 3領域での各大区分別に自己評価結果を述べたい。(表4, 図7, 図8, 図9参照)

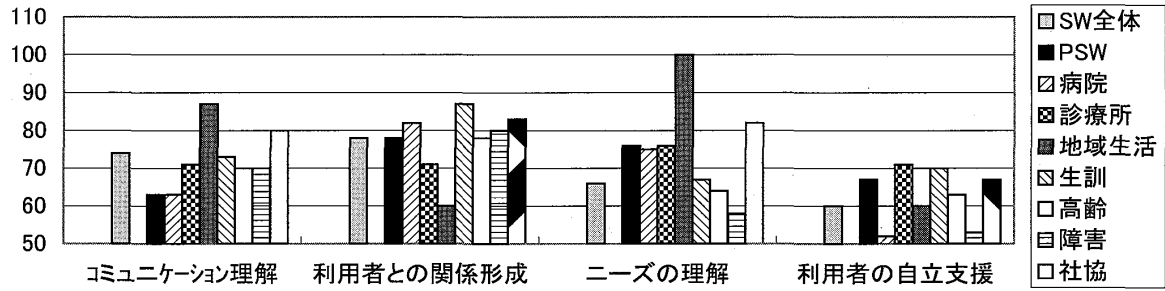


図7 利用者の理解・関係形成の項目の実習種別の比較

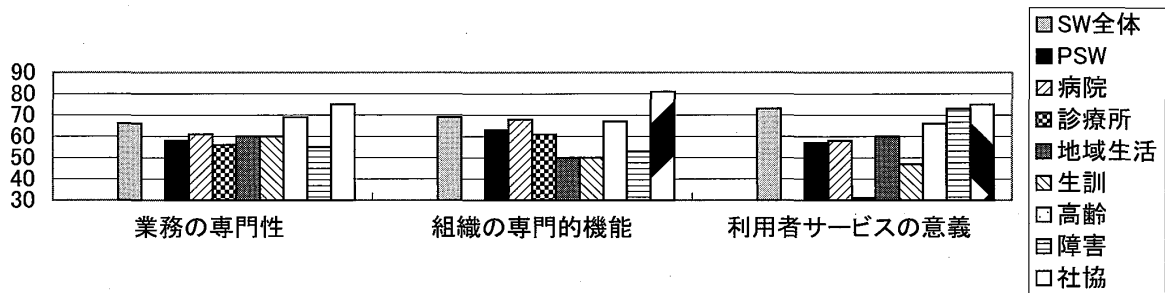


図8 実習先の役割と専門機能の理解の項目の比較

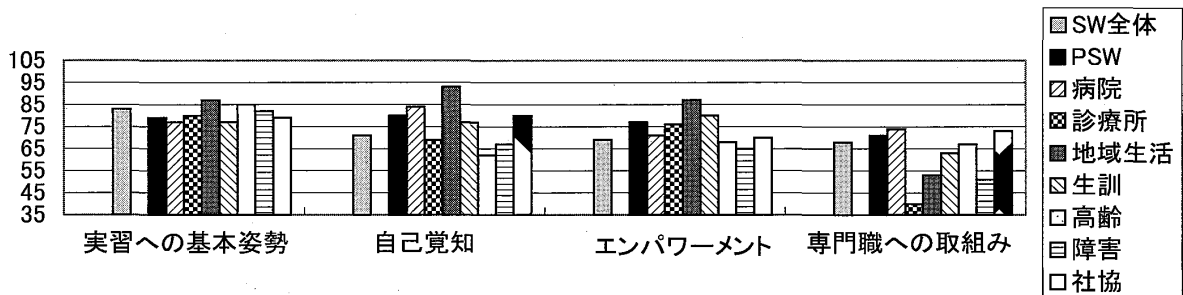


図9 自己覚知とエンパワーメント項目の比較

ア、「利用者の理解・関係形成」評価項目と SW 実習並びに PSW 実習との関係

(ア) コミュニケーション理解

SW 実習が 74 点で、SW 実習の方が自己点検評価が 11 点高い。

実習種別では、PSW 実習の地域生活支援センターが 87 点で高く、ついで社会福祉協議会が 80 点で高い。低い実習種別では精神科病院が 63 点で一番低い。

(イ) 利用者との関係形成

PSW 実習と SW 実習とで同じ 78 点である。

実習種別では、SW 実習の社会福祉協議会が 83 点で高く、ついで PSW 実習の精神科病院が 82 点で続いている。

「社会福祉援助技術現場実習」並びに「精神保健福祉援助実習」の実習課題の自己評価に関する比較研究

(ウ) ニーズの理解

PSW 実習が 76 点で、SW 実習より自己点検評価が 10 点高い。

実習種別では、PSW 実習の地域生活支援センターが 100 点で高く、ついで社会福祉協議会が 82 点と続いている。

(エ) 利用者の自立支援

PSW 実習の方が 67 点で、SW 実習より自己点検評価が 7 点高い。

実習種別では、PSW 実習の神経科クリニックが 71 点で高く、ついで精神の社会復帰施設の生活訓練施設が 70 点と続いている。

イ、「実習先の役割と専門機能の理解」評価項目と SW 実習並びに PSW 実習との関係

(ア) 業務の専門性

SW 実習の方が 66 点で、PSW 実習より自己点検評価が 8 点高い。

実習種別では、SW 実習の社会福祉協議会が 75 点で高く、ついで高齢者施設が 69 点と続いている。

(イ) 組織の専門的機能

SW 実習の方が 69 点で、PSW 実習より自己点検評価が 6 点高い。

実習種別では、SW 実習の社会福祉協議会が 81 点で高く、ついで精神科病院が 68 点と続いている。

(ウ) 利用者サービスの意義

SW 実習の方が 73 点で、PSW 実習より自己点検評価が 16 点高い。

実習種別では、SW 実習の社会福祉協議会が 75 点で高く、ついで障害者施設が 73 点と続いている。

ウ、「自己覚知とエンパワーマント」評価項目と SW 実習並びに PSW 実習との関係

(ア) 実習生への基本姿勢

SW 実習の方が 83 点で、PSW 実習より自己点検評価が 4 点高い。

実習種別では、SW 実習の高齢者施設が 85 点で高く、ついで障害者施設が 82 点と続いている。

(イ) 自己覚知

PSW 実習が 80 点で、SW 実習より自己点検評価が 9 点高い。

実習種別では、PSW 実習の地域生活支援センターが 93 点で高く、ついで精神科病院が 84 点と続いている。

(ウ) エンパワーメント

PSW 実習が 77 点で、SW 実習より自己点検評価 8 点高い。

実習種別では、PSW 実習の地域生活支援センターが 87 点で高く、ついで生活訓練施設が 80 点と続いている。

(エ) 専門職への取組み

PSW 実習が 71 点で、SW 実習より自己点検評価 3 点高い。

実習種別では、PSW 実習の精神科病院が 74 点で高く、ついで社会福祉協議会が 73 点と続いている。

5. 考察と結論

(1) 自己評価と施設評価の SW 実習と PSW 実習との関係

自己点検確認結果と実習先評価との関係は、SW 実習と PSW 実習の 3 つの評価項目である「利用者理解」、「専門機能の理解」及び「実習基本姿勢」の総計では、SW 実習の方が、PSW 実習よりも SW 実習の方が施設評価は高い。

評価項目の内訳別に施設評価の方が自己評価より高い順に、SW 実習では、「実習基本姿勢」、「利用者理解」、「専門機能の理解」の順であり、PSW 実習では、「専門機能の理解」、「利用者理解」の順から、両実習で逆転している。

また、PSW 実習では、「実習基本姿勢」は、学生の評価より、施設評価の方が厳しい状況にある。

評価項目（行間変動）と SW 実習と PSW 実習との関係（列間変動）につき、分散分析の結果でも、 $F=11.25275 > F(0.95)=8.526342$ から有意差があり、PSW 実習の方が、SW 実習より学生の自己評価より、施設評価の方が厳しいといえる。

(2) 自己評価項目の SW 実習並びに PSW 実習との関係

SW 実習全体と PSW 実習全体の平均点は、SW 実習が 71 点。PSW 実習は 69 点で、PSW 実習が 2 点下回っている程度で、殆ど差がないことが明らかにされた。

SW 実習及び PSW 実習を列に配置し、実習評価項目の大区分評価項目を行に配置し、二元配置による分散分析の結果は、SW 実習及び PSW 実習の列間変動は、 $F \text{ 値}=0.17813 < F(0.95)=3.28501$ から、両実習間には全評価項目総計では差がないことが確認された。

「社会福祉援助技術現場実習」並びに「精神保健福祉援助実習」の実習課題の自己評価に関する比較研究

(3) 各評価項目での SW 実習並びに PSW 実習との関係

3 領域別では、「利用者の理解と関係形成」が PSW 実習が 1 点上回り、「実習施設（機関）の役割と専門機能の理解」で、SW 実習が大区分平均で 10 点上回っている。「自己覚知とエンパワーメント」では、PSW 実習が大区分平均で 4 点上回っている。

SW 実習が PSW 実習を上回っている大区分項目として、「コミュニケーションの理解と実践」や「専門機能の理解」では、SW 実習が 10 点程度上回っているが、「実習に取り組む姿勢」は SW 実習が 4 点上回っているものの大区分の「利用者のニーズの理解」、「利用者のニーズの自立支援」、「自己覚知」、「エンパワーメント」及び「ソーシャルワーカーとしての専門職の取り組み」は区分平均で約 7 点 PSW 実習が SW 実習を上回っていることが明らかにされた。

(4) 今後の事前・事後の実習教育の課題

以上から、PSW 実習と SW 実習とでは、PSW 実習が、SW 実習よりもメンタル面の理解が難しいことからということの反映結果でもあり、「コミュニケーションの理解」が難しく、必然的に「自己覚知とエンパワーメント」の自己評価が高くなる傾向にある。

従って、今後の両実習の事前・事後指導等の実習教育では、上記結果を踏まえた対応をしていく必要がある。

併せて、実習受け入れ先の実習環境並びに実習指導環境に応じ、養成大学と実習受け入れ先との連携により、学生の希望を踏まえた実習施設選択ができるようマッチングの大切さも本研究で明らかにされたといえる。

注

1. 本学の平成 16 年度実施による実習環境の調査結果によれば、実習受け入れ環境としての実習環境は、PSW 実習の方が、SW 実習よりも約 3 倍困難であり、実習指導環境面でも、SW 実習が 21 ポイント PSW 実習を上回っていること。実習学生の実習満足度でも、23 ポイント SW 実習の方が PSW 実習よりも満足度が高いことが明らかにされている。（梅澤・松原「社会福祉援助技術現場実習並びに精神保健福祉援助実習の実習教育の課題に関する比較研究」『川村学園女子大学研究紀要』（第 17 巻 第 1 号）、川村学園女子大学、2006 年 3 月。p125, p135.）

主な参考文献

1. 日本社会福祉士会『社会福祉実習担当者養成セミナー』、2004 年 3 月、52 ページ。

2. 大西敏浩他「社会福祉援助現実習の課題」, (四天王寺国際仏教大学), 『日本社会福祉学会第 52 回大会報告集』, 2004 年 10, 135 ページ,
3. 梅澤・藤原・松原「社会福祉援助技術現場実習指導からみた実習教育の課題に関する研究」『川村学園女子大学研究紀要』(第 16 巻 第 1 号), 川村学園女子大学, 2005 年 3 月.
4. 梅澤・松原「社会福祉援助技術現場実習並び精神保健福祉援助実習の実習教育の課題に関する比較研究」『川村学園女子大学研究紀要』(第 17 巻 第 1 号), 川村学園女子大学, 2006 年 3 月.
5. 松宮研究代表「精神保健福祉援助実習における養成機関および実習機関の連携問題」『平成 16 年度 川崎医療福祉大学プロジェクト研究成果報告書』, 川崎医療福祉大学, 2006 年 3 月.

「社会福祉援助技術現場実習」並びに「精神保健福祉援助実習」の実習課題の自己評価に関する比較研究

図 10 平成 17 年度 SW・PSW 実習の自己点検確認調査結果比較表

平成17年度 SW・PSW実習の自己点検確認調査結果比較表

計1＝病院・診療所
計2＝地域生活支援センター＋生活訓練施設
産施設
高齡＝特別養護老人ホーム＋老人デイサービス
障害＝障害者入所更生施設＋障害者通所

I : 利用者の理解・関係形成

病院	診療所	計1	地域セ	生訓	計2	psw計	高齡	障害	社協	SW計	差
68	72	70	77	74	75	71	69	65	78	70	-1

1、コミュニケーションの理解と実践

63	71	69	87	73	78	63	70	70	80	74	11
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

① 接しやすい印象に留意	92	89	90	100	100	100	93	83	96	92	90	-3
② 積極的に声掛け等	42	89	75	100	83	89	57	79	79	92	82	25
③ 非言語的コミュニケーションの理解と実践	58	56	57	67	67	67	60	54	67	83	65	5
④ 声掛けと利用者理解へ心掛け	58	67	62	100	83	89	70	75	46	67	70	0
⑤ 目的意識によるコミュニケーションに留意	67	56	62	67	33	44	57	58	63	67	62	5

2、利用者との関係形成とその活用

82	71	77	60	87	78	78	78	80	83	78	0
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

① 受け止め難い言動や場面に向かう。	75	33	57	100	83	89	67	71	71	83	68	1
② プライバシー尊重に留意する。	83	78	81	33	83	67	77	83	92	92	88	11
③ 利用者と適度の距離感	83	89	86	67	100	89	87	75	67	75	72	-15
④ 利用者の人間性や尊厳に留意。	92	89	90	67	100	89	90	88	83	83	82	-8
⑤ 「傾聴」、「共感的理解」、「受容」等に留意する。	75	67	71	33	67	56	67	75	88	83	82	15

3、ニーズの理解

75	76	75	100	67	78	76	64	58	82	66	-10
----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	-----

① 利用者の能力や性格特性の理解。	75	78	76	100	67	78	77	58	63	83	65	-12
② 利用者の問題や課題に関心を持つ。	83	78	81	100	83	89	83	63	63	83	67	-16
③ 利用者の変化の原因や背景への関心。	83	78	81	100	83	89	83	75	58	67	68	-15
④ 利用者の多様性・個性・特性・背景等への関心と理解	67	78	71	100	67	78	73	58	58	83	65	-8
⑤ 利用者の家族や周囲の人との関係性理解	67	67	67	100	33	56	63	67	46	92	63	0

4、利用者の自立支援

52	71	58	60	70	65	67	63	53	67	60	-7
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

① 利用者の選択と自己決定を引き出す仕組み。	50	56	52	67	67	67	57	50	54	67	55	-2
② 可能性を引き出すための取り組み。	50	67	53	33	83	56	88	63	63	58	62	-26
③ 自己実現への持つ意味の理解。	58	78	67	33	67	56	63	67	46	67	60	-3
④ 周囲の人や環境面等多面的理解。	58	67	62	100	50	67	63	62	38	67	54	-9
⑤ 生活に必要な支援を考える。	42	87	57	67	83	78	63	71	63	75	68	5

II 実習施設(機関)の組織の役割と専門的機能の理解

62	49	63	57	52	53	59	67	60	77	69	10
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

1、業務の専門性の理解

61	56	60	60	60	60	58	69	55	75	66	8
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

① 日々の目標を樹立し、反省を踏まえて実習。	75	67	71	67	67	67	70	75	63	83	72	2
② チームアプローチへの理解を図る。	58	33	56	33	83	67	59	71	46	67	62	3
③ 実習日誌の手法を学ぶ。	58	67	62	100	83	89	60	75	67	67	70	10
④ 業務の理解と応用力を高める。	58	67	62	33	33	33	53	67	58	83	67	14
⑤ 行事やレク等の企画の立て方を学ぶ。	56	44	50	67	33	44	48	58	42	75	61	13

2、組織の専門的機能の理解

68	61	69	50	50	47	63	67	53	81	69	6
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

① 職員間のコミュニケーションや連携方法を学ぶ。	58	67	71	33	67	56	67	67	71	83	72	5
② 利用者への対応方法の共通認識等を学ぶ。	67	87	71	67	67	67	70	75	67	83	73	3
③ 他の専門職との役割分担、連携のあり方。	83	87	81	—	33	22	70	86	54	83	72	2
④ 関連する他の地域社会資源を学ぶ。	67	33	61	67	50	56	59	50	38	83	65	6
⑤ 組織のスーパーバイザー等の役割を学ぶ。	67	33	60	33	33	33	50	58	33	75	61	

3、実習施設(機関)の役割と利用者サービスの意義・特性の理解

	58	31	59	60	47	51	57	66	73	75	73	16
① 背景となる制度やシステムを学ぶ	50	33	50	33	33	33	44	63	100	75	80	36
② 実習施設(機関)と地域のニーズ等を学ぶ。	67	56	62	67	50	56	67	67	54	75	69	2
③ ボランティアの受け入れ状況を学ぶ。	50	22	53	100	67	78	63	72	88	83	81	18
④ 地域社会資源との連携状況を学ぶ。	67	33	61	67	50	56	59	62	67	83	68	9
⑤ 利用者サービス向上に向けての対応を学ぶ	58	11	67	33	33	33	62	67	54	83	67	5

Ⅲ 自己覚知とエンパワメント

	77	66	77	80	74	76	77	71	66	76	73	-4
--	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

1 実習に取り組む基本姿勢

	77	80	78	87	77	80	79	85	82	79	83	4
① 体調などの健康面の自己管理を図る。	83	78	81	100	67	78	80	96	92	92	93	13
② 緊張やストレス等の精神面の「自己管理」	75	89	81	67	83	78	80	75	88	67	82	2
③ 基礎知識などの確認等の事前準備。	42	56	48	67	67	67	53	71	58	67	65	12
④ 服装や髪の色などふさわしい配慮。	92	100	95	100	100	100	97	92	100	92	95	-2
⑤ スーパーバイザーからの指示や注意を学習に反映	92	78	86	100	67	78	83	90	71	75	79	-4

2 自己覚知

	84	69	80	93	77	82	80	62	67	80	71	-9
① 助言などを謙虚に受け止め、自分に向き合う。	92	56	89	100	83	89	89	75	79	75	77	-12
② 可能性や限界への理解を深め、今後の努力。	92	56	89	100	83	89	89	58	50	83	68	-21
③ 適切に調整することの大切さを学ぶ。	78	78	78	100	67	78	67	50	75	75	72	5
④ 先入観等に意識を向け、よりよい方向性模索	89	89	78	100	83	89	89	71	79	92	78	11
⑤ 自己の内面に意識を向け、スーパービジョンに	67	67	67	67	67	67	67	58	54	75	60	-7

3、エンパワメント

	71	76	81	87	80	82	77	68	65	70	69	-8
① 興味や関心を課題として具体化、	78	89	83	67	67	67	78	71	63	58	68	-10
② 特技や趣味を援助場面で活用する。	67	33	75	67	100	89	57	79	71	58	75	18
③ 指導者に自己の考えを伝え、自己を高める	67	89	78	100	50	67	74	67	50	75	62	-12
④ 体験での気づきから、自己への理解。	67	89	94	100	100	100	96	67	75	83	73	-23
⑤ 自分をさらに高める取り組みを考える。	78	78	78	100	83	89	81	58	67	75	65	-16

4、ソーシャルワーカー(PSW)への専門職への取り組み

	74	40	69	53	63	60	71	67	51	73	68	-3
① マンネリ化や情性を排除する努力継続。	78	78	78	67	50	56	59	75	58	67	70	11
② SWの専門性の関心と今後の方向性を確立。	89	22	83	33	83	67	76	75	42	83	67	-9
③ 倫理基準に準拠した対応の理解	89	55	72	67	67	67	70	58	42	83	70	0
④ バイステックの7原則等の援助技術を理解。	56	11	50	67	50	56	90	58	54	67	72	-18
⑤ 事例研究の機会から利用者の課題等を模索	56	33	60	33	67	56	62	71	58	67	63	1

評価の総合計	69	62	70	71	67	68	69	69	64	77	71	2
	207	189	211	214	200	204	207	207	191	231	212	5

図 11 実習状況自己点検確認調査結果表

実習状況自己点検確認調査結果表

実習種別
SW 総計

施設数
20施設

I : 利用者の理解・関係形成

A	B	C	D	点数	%
					70

1、コミュニケーションの理解と実践

					74
--	--	--	--	--	----

① 接しやすい印象(明るさ・優しさ・丁寧・笑顔等)を心がける	15	4	1		90
② 自分から積極的に声掛け等をおこなう。	11	7	2	3	82
③ 非言語的コミュニケーションの理解とその実践。	3	13	4		65
④ 声掛けが困難な方等への声掛けと利用者理解へ心掛け。	4	12	2	2	70
⑤ 支援という目的意識を持ったコミュニケーションを心がける。	2	13	5		62

2、利用者との関係形成とその活用

					78
--	--	--	--	--	----

① 受け止め難い言動や場面に自分なりに向き合う。	4	13	3		68
② プラバシー尊重に留意する。	13	7			88
③ 利用者と適度の距離感を保つ。	6	11	3		72
④ 利用者の人間性や尊厳に留意する。	10	9	1		82
⑤ 「傾聴」、「共感的理解」、「受容」等に留意する。	11	7	2		82

3、ニーズの理解

					66
--	--	--	--	--	----

① 利用者の能力や性格特性への理解。	3	13	4		65
② 利用者の抱えている問題や課題に関心を寄せる。	5	10	5		67
③ 利用者の変化の原因や背景への関心を寄せる。	6	9	5		68
④ 利用者の多様性・個性・特性・背景等への関心と理解。	3	13	4		65
⑤ 利用者とその家族や周囲の人と関係性の理解。	5	8	7		63

4、利用者の自立支援

					60
--	--	--	--	--	----

① 利用者の選択と自己決定を引き出すための取り組み。	2	9	9		55
② 利用者の可能性を引き出すための取り組み。	2	13	5		62
③ 支援が利用者との人間形成や自己実現への持つ意味	2	12	6		60
④ 利用者の周囲の人や環境面等多面的理解。	1	10	8	1	54
⑤ その人らしい生活に必要な支援を考える。	3	14	2	1	68

II 実習施設(機関)の組織の役割と専門的機能の理解

					69
--	--	--	--	--	----

1、業務の専門性の理解

					66
--	--	--	--	--	----

① 日々の目標を樹立し、その反省を踏まえの実習に留意。	6	11	3		72
② チームアプローチへの理解を図る。	4	9	7	1	62
③ 日々の実習日誌の手法を学ぶ。	7	8	5		70
④ 業務の理解と応用力を高める。	3	14	3		67
⑤ 行事やレクリエーション等の企画の立て方を学ぶ。	4	7	7	1	61

2、組織の専門的機能の理解

					69
--	--	--	--	--	----

① 職員間のコミュニケーションや連携方法を学ぶ。	6	11	3		72
② 利用者への対応方法の共通認識等を学ぶ。	6	12	2		73
③ 他の専門職との役割分担、連携のあり方を学ぶ。	8	6	5	1	72
④ 実習施設(機関)に関連する他の地域社会資源を学ぶ。	2	13	3	1	65
⑤ 組織におけるスーパーバイザー等の役割を学ぶ。	3	8	6	3	61

3、実習施設(機関)の役割と利用者サービスの意義・特性の理解

						73
① 援助の背景となる制度(介護保険制度等)やシステムを学ぶ	11	6	3			80
② 実習施設(機関)と地域のニーズ等を学ぶ。	3	13	2	1		69
③ ボランティアの受け入れ状況を学ぶ。	8	10		2		81
④ 地域社会資源との連携状況を学ぶ。	4	12	3	1		68
⑤ 利用者サービス向上に向けての対応を学ぶ	1	6	1			67

Ⅲ 自己覚知とエンパワメント

1 実習に取り組む基本姿勢

						83
① 体調などの健康面の自己管理を図る。	17	2	1			93
② 緊張やストレスをためないよう精神面の「自己管理」	11	6	2	1		82
③ 基礎知識などの確認等の事前準備への留意。	5	9	6			65
④ 服装や髪の色など実習にふさわしいよう配慮。	17	3				95
⑤ スーパーバイザーからの指示や注意を受けとめ学習に反映させる						
	10	6	3	1		79

2 自己覚知

						71
① 助言などを謙虚に受け止め、意識しなかった自分に向き合う。						
	9	8	3			77
② 自分の可能性や限界への理解を深め、今後の努力の方向性を探る。						
	4	13	3			68
③ 自己の感受性を理解し、適切に調整することの大切さを学ぶ。						
	5	13	2			72
④ 自分の先入観や考え方の傾向に意識を向け、よりよい方向性を模索する。						
	8	11	1			78
⑤ 葛藤などの自己の内面の動きに意識を向け、スーパービジョンにつなげる。						
	4	8	8			60

3、エンパワメント

						69
① 自己の興味や関心を実習課題として具体化する。	4	12	3	1		68
② 自己の特技や趣味を援助場面で活用する。	8	8	3	1		75
③ 実習指導者に自己の考えを伝え、自己を高める視点を学ぶ。						
	4	9	7			62
④ 実習体験での気づきから、自己への理解を深める。	5	14	1			73
⑤ 自分をさらに高める取り組みを考える。	3	13	4			68

4、ソーシャルワーカー(SW)への専門職への取り組み

						68
① 実習中、マンネリ化や惰性を排除する努力を継続。	6	9	4	1		70
② ソーシャルワーカーの専門性に関心を持ち、今後の方向性を確立。						
	5	9	5	1		67
③ 専門職としての倫理基準に準拠した対応が理解できた。	5	12	3			70
④ バイステックの7原則等の援助技術が理解できた。	7	9	4			72
⑤ 事例研究の機会も得られ、利用者の課題と解決方向を模索できた。						
	3	11	5	1		63

評価の総合計						71
--------	--	--	--	--	--	----

図 12 実習状況自己点検確認調査表

実習状況自己点検確認調査表

実習種別
PSW 総計

施設数
10施設

I : 利用者の理解・関係形成

A	B	C	D	点数	%
					71

1、コミュニケーションの理解と実践

					63
--	--	--	--	--	----

① 接しやすい印象(明るさ・優しさ・丁寧・笑顔等)を心がける	8	2				93
② 自分から積極的に声掛け等をおこなう。	4	2	1	3		57
③ 非言語的コミュニケーションの理解とその実践	1	6	3			60
④ 声掛けが困難な方等への声掛けと利用者理解へ心掛け	3	5	2			70
⑤ 支援という目的意識を持ったコミュニケーションを心がける	1	5	4			57

2、利用者との関係形成とその活用

					78
--	--	--	--	--	----

① 受け止め難い言動や場面に自分なりに向き合う。	4	3	2	1		67
② プラバシー尊重に留意する。	4	5	1			77
③ 利用者と適度の距離感を保つ。	6	4				87
④ 利用者の人間性や尊厳に留意する。	7	3				90
⑤ 「傾聴」、「共感的理解」、「受容」等に留意する	3	4	3			67

3、ニーズの理解

					76
--	--	--	--	--	----

① 利用者の能力や性格特性への理解。	3	7				77
② 利用者の抱えている問題や課題に関心を寄せる。	5	5				83
③ 利用者の変化の原因や背景への関心を寄せる。	5	5				83
④ 利用者の多様性・個性・特性・背景等への関心と理解。	3	6	1			73
⑤ 利用者とその家族や周囲の人と関係性の理解。	4	1	5			63

4、利用者の自立支援

					67
--	--	--	--	--	----

① 利用者の選択と自己決定を引き出すための取り組み。	1	5	4			57
② 利用者の可能性を引き出すための取り組み。	2	1	5	2		88
③ 支援が利用者の人間形成や自己実現への持つ意味	3	3	4			63
④ 利用者の周囲の人や環境面等多面的理解。	1	7	2			63
⑤ その人らしい生活に必要な支援を考える。	2	5	3			63

II 実習施設(機関)の組織の役割と専門的機能の理解

					59
--	--	--	--	--	----

1、業務の専門性の理解

					58
--	--	--	--	--	----

① 日々の目標を樹立し、その反省を踏まえの実習に留意。	1	9				70
② チームアプローチへの理解を図る。	2	3	4	1		59
③ 日々の実習日誌の手法を学ぶ。	3	5	2			60
④ 業務の理解と応用力を高める。	1	4	5			53
⑤ 行事やレクリエーション等の企画の立て方を学ぶ。		4	5	1		48

2、組織の専門的機能の理解

					63
--	--	--	--	--	----

① 職員間のコミュニケーションや連携方法を学ぶ。	2	6	2			67
② 利用者への対応方法の共通認識等を学ぶ。	2	7	1			70
③ 他の専門職との役割分担、連携のあり方を学ぶ。	4	2	3	1		70
④ 実習施設(機関)に関連する他の地域社会資源を学ぶ。	1	5	3	1		59
⑤ 組織におけるスーパーバイザー等の役割を学ぶ。	1	2	5	2		50

3、実習施設(機関)の役割と利用者サービスの意義・特性の理解

						57
① 援助の背景となる制度(介護保険制度等)やシステムを学ぶ	3	6	1			44
② 実習施設(機関)と地域のニーズ等を学ぶ。	2	5	2	1		67
③ ボランティアの受け入れ状況を学ぶ。	2	3	3	2		63
④ 地域社会資源との連携状況を学ぶ。	1	5	3	1		59
⑤ 利用者サービス向上に向けての対応を学ぶ	2		5	3		52

Ⅲ 自己覚知とエンパワメント

1 実習に取り組む基本姿勢

						79
① 体調などの健康面の自己管理を図る。	5	4	1			80
② 緊張やストレスをためないよう精神面の「自己管理」	5	4	1			80
③ 基礎知識などの確認等の事前準備への留意。	1	4	5			53
④ 服装や髪の色など実習にふさわしいよう配慮。	9	1				97
⑤ スーパーバイザーからの指示や注意を受けとめ学習に反映させる。						
	5	5				83

2 自己覚知

						80
① 助言などを謙虚に受け止め、意識しなかった自分に向き合う。						
	6	3		1		89
② 自分の可能性や限界への理解を深め、今後の努力の方向性を探る。						
	6	3		1		89
③ 自己の感受性を理解し、適切に調整することの大切さを学ぶ。						
	3	6				67
④ 自分の先入観や考え方の傾向に意識を向け、よりよい方向性を模索する。						
	6	3				89
⑤ 葛藤などの自己の内面の動きに意識を向け、スーパービジョンにつなげる。						
	1	7	1			67

3、エンパワメント

						77
① 自己の興味や関心を実習課題として具体化する。	3	6				78
② 自己の特技や趣味を援助場面で活用する。	4	2	1	2		57
③ 実習指導者に自己の考えを伝え、自己を高める視点を学ぶ。						
	3	5	1			74
④ 実習体験での気づきから、自己への理解を深める。	8	1				96
⑤ 自分をさらに高める取り組みを考える。	5	3	1			81

4、ソーシャルワーカー(PSW)への専門職への取り組み

						71
① 実習中、マンネリ化や惰性を排除する努力を継続。	3	4	2			59
② ソーシャルワーカーの専門性に関心を持ち、今後の方向性を確立。						
	3	3	1	2		76
③ 専門職としての倫理基準に準拠した対応が理解できた。	2	6	1			70
④ バイステックの7原則等の援助技術が理解できた。	1	2	4	2		90
⑤ 事例研究の機会も得られ、利用者の課題と解決方向を模索できた。						
	1	4	2	2		62

評価の総合計						69
--------	--	--	--	--	--	----

(自己点検確認調査用紙例)

平成17年度 社会福祉援助技術実習指導(2005年11月9日)

実習状況自己点検確認調査表

実習状況を、振り返り、自己点検し確認の機会としましょう。

実習種別	実習先名	実習期間 月 日 ~ 月 日 月 日 ~ 月 日
学生番号	氏名	提出月日 月 日

○ 記入要領	A=積極的に取り組めた。 B=ある程度取り組めた C=十分とくめたとは言えない。 D=実習課題として実習種別等の理由で実習先で用意されなかった。 以上、設問の回答肢として該当する上記記号に該当する回答肢を○で囲んで下さい。
--------	---

I : 利用者の理解・関係形成 (A, B, C, D)

1、コミュニケーションの理解と実践 (A, B, C, D)

- | | |
|---------------------------------|----------------|
| ① 接しやすい印象(明るさ・優しさ・丁寧・笑顔等)を心がける。 | (A, B, C, D) |
| ② 自分から積極的に声掛け等をおこなう。 | (A, B, C, D) |
| ③ 非言語的コミュニケーションの理解とその実践。 | (A, B, C, D) |
| ④ 認知症の方等への声掛けと利用者理解へ心掛ける。 | (A, B, C, D) |
| ⑤ 支援という目的意識を持ったコミュニケーションを心がける。 | (A, B, C, D) |

2、利用者との関係形成とその活用 (A, B, C, D)

- | | |
|----------------------------|----------------|
| ① 受け止め難い言動や場面に自分なりに向き合う。 | (A, B, C, D) |
| ② プラバシー尊重に留意する。 | (A, B, C, D) |
| ③ 利用者と適度の距離感を保つ。 | (A, B, C, D) |
| ④ 利用者の人間性や尊厳に留意する。 | (A, B, C, D) |
| ⑤ 「傾聴」、「共感的理解」、「受容」等に留意する。 | (A, B, C, D) |

3、ニーズの理解 (A, B, C, D)

- | | |
|-----------------------------|----------------|
| ① 利用者の能力や性格特性への理解。 | (A, B, C, D) |
| ② 利用者の抱えている問題や課題に関心を寄せる。 | (A, B, C, D) |
| ③ 利用者の変化の原因や背景への関心を寄せる。 | (A, B, C, D) |
| ④ 利用者の多様性・個性・特性・背景等への関心と理解。 | (A, B, C, D) |
| ⑤ 利用者とその家族や周囲の人との関係性の理解。 | (A, B, C, D) |

4、利用者の自立支援 (A, B, C, D)

- | | |
|------------------------------|----------------|
| ① 利用者の選択と自己決定を引き出すための取り組み。 | (A, B, C, D) |
| ② 利用者の可能性を引き出すための取り組み。 | (A, B, C, D) |
| ③ 支援が利用者の人間形成や自己実現への持つ意味の理解。 | (A, B, C, D) |
| ④ 利用者の周囲の人や環境面等多面的理解。 | (A, B, C, D) |
| ⑤ その人らしい生活に必要な支援を考える。 | (A, B, C, D) |

II : 実習施設(機関)の組織の役割と専門的機能の理解 (A, B, C, D)

1、業務の専門性の理解 (A, B, C, D)

- | | |
|-----------------------------|----------------|
| ① 日々の目標を樹立し、その反省を踏まえの実習に留意。 | (A, B, C, D) |
| ② チームアプローチへの理解を図る。 | (A, B, C, D) |
| ③ 日々の実習日誌の手法を学ぶ。 | (A, B, C, D) |
| ④ 業務の理解と応用力を高める。 | (A, B, C, D) |
| ⑤ 行事やレクリエーション等の企画の立て方を学ぶ。 | (A, B, C, D) |

2、組織の専門的機能の理解

(A, B, C, D)

① 職員間のコミュニケーションや連携方法を学ぶ。	(A, B, C, D)
② 利用者への対応方法の共通認識等を学ぶ。	(A, B, C, D)
③ 他の専門職との役割分担、連携のあり方を学ぶ。	(A, B, C, D)
④ 実習施設(機関)に関連する他の地域社会資源を学ぶ。	(A, B, C, D)
⑤ 組織におけるスーパーバイザー等の役割を学ぶ。	(A, B, C, D)

3、実習施設(機関)の役割と利用者サービスの意義・特性の理解

(A, B, C, D)

① 援助の背景となる制度(介護保険制度等)やシステムを学ぶ。	(A, B, C, D)
② 実習施設(機関)と地域のニーズ等を学ぶ。	(A, B, C, D)
③ ボランティアの受け入れ状況を学ぶ。	(A, B, C, D)
④ 地域社会資源との連携状況を学ぶ。	(A, B, C, D)
⑤ 職場内研修会等、利用者サービス向上に向けての対応を学ぶ。	(A, B, C, D)

Ⅲ : 自己覚知とエンパワメント

(A, B, C, D)

1、実習に取り組む基本姿勢

(A, B, C, D)

① 体調などの健康面の自己管理を図る。	(A, B, C, D)
② 緊張やストレスをためないよう精神面の「自己管理」	(A, B, C, D)
③ 基礎知識などの確認等の事前準備への留意。	(A, B, C, D)
④ 服装や髪の色など実習にふさわしいよう配慮。	(A, B, C, D)
⑤ スーパーバイザーからの指示や注意を受けとめ学習に反映させる。	(A, B, C, D)

2、自己覚知

(A, B, C, D)

① 助言などを謙虚に受け止め、意識しなかった自分に向き合う。	(A, B, C, D)
② 自分の可能性や限界への理解を深め、今後の努力の方向性を探る。	(A, B, C, D)
③ 自己の感受性を理解し、適切に調整することの大切さを学ぶ。	(A, B, C, D)
④ 自分の先入観や考え方の傾向に意識を向け、よりよい方向性を模索する。	(A, B, C, D)
⑤ 葛藤ルええなどの自己の内面の動きに意識を向け、スーパービジョンにつなげる。	(A, B, C, D)

3、エンパワメント

(A, B, C, D)

① 自己の興味や関心を実習課題として具体化する。	(A, B, C, D)
② 自己の特技や趣味を援助場面で活用する。	(A, B, C, D)
③ 実習指導者に自己の考えを伝え、自己を高める視点を学ぶ。	(A, B, C, D)
④ 実習体験での気づきから、自己への理解を深める。	(A, B, C, D)
⑤ 自分をさらに高める取り組みを考える。	(A, B, C, D)

4、ソーシャルワーカーへの専門職への取り組み

(A, B, C, D)

① 実習中、マンネリ化や惰性を排除する努力を継続。	(A, B, C, D)
② ソーシャルワーカーの専門性に関心を持ち、今後の方向性を確立。	(A, B, C, D)
③ 専門職としての倫理基準に準拠した対応が理解できた。	(A, B, C, D)
④ バイステックの7原則等の援助技術が理解できた。	(A, B, C, D)
⑤ 事例研究の機会も得られ、利用者の課題と解決方向を模索できた。	(A, B, C, D)

評価の合計

A	=
B	=
C	=
D	=